

伊那谷スケッチ

～自然と文化を巡るふるさと再発見～ 第23回



●写真キャプション

8月14日に行われる大鹿村花火大会の様子

●本文

大鹿村の花火大会は、毎年8月14日に行われる。谷に響く大音量は他にはないということで「夏の花火大会」は大鹿村で、と決めている人も少なからずいるらしい。昭和40年代に村の青年部が立ち上げた花火大会は今となっては村に欠かせない夏の風物詩となっている。

番付俵を見るのも楽しみの一つ。花火は、村内外の企業の広告として打ち上げられる他、村内外の自治体や個人が日頃の感謝の気持ちを伝えたり、結婚、出産、成人など節目を報告する手段としても用いられる。一口1万円から花火が上げられ、メッセージを入れる事ができる。それが玉名となる。

毎年、番付俵が配られると御近所では「今年は△△の〇〇さんが上げとる」「あそこんこのあんちゃは、結婚したんだわ」など、しばしば世間話の対象にな

る。「伝言板」のようだ。

毎年、都内から大鹿村の花火大会にいらっしゃるお客様が「昔と比べて、花火が少なくなった」とつぶやいていた。その方が夏の花火に合わせて来村するようになって20年余り。当時は100を超える花火があったそうだが、今年は70ほど。人口減少に伴い、花火が上がる数も少なくなるのだろう。祭りの規模が小さくなるとかつての盛大さを知っている人は、少なからず寂しい気持ちが湧いてくるのも分かる。けれどそれはそれでミニマムな集落に見合った形になっているのだろうと思う。

私は、今年の番付をじっくり見ながら建設業が多いな、と思った。大鹿村は土建の村なので毎年、その数は多いといえば多いのだが、今年は聞きなじみのない会社名もあったように感じる。リニアの工事で世話になるから広告でも出しておくか——、そんな感じだろうか。玉名には「リニア」とは掲載されてこそないが、その3文字が想像できるような文言がある。花火大会を取り仕切る村の青年部も気をつかったのだろう。花火の番付俵で村の様子が見えてくる。さて来年は一体どんな村の姿が垣間見えるのだろうか。

カタチだけの「話し合いの場」

2015年6月2日、リニア工事についてJR東海による住民説明会が開催された。その後、村の行政懇談会が4日から15日の日程で行われた。毎年行われている行政懇談会はここ数年リニア計画についての意見・質問で終始する。

今回の行政懇談会の内容には驚いた。冒頭に2015年度の行政指針や計画の説明があった後、JR東海の説明を追従するような形で提供された画像を使いながら、主にリニア工事に伴う車道の改良について約1時間説明が行われ、その後の住民との意見交換は手を上げている人がいるにも関わらず、時間がないのでアンケートの実施で補い、打ち切るというものだった。少なくとも私が出席した2地域の会場ではそうだった。村が実施したアンケートの内容も戸惑いを隠せない。先のJR東海の説明について住民の理解度を把握するためのものだった。

「行政懇談会」であるならば、これまで村がどういった働きかけをJR東海にしている、6月2日の説明会ではどれだけ答えられているのか村民は知りたいと思うし、その結果を踏まえて新たな案というものも考えられるというものではないだろうか。現状が曖昧な状態でいくら「意見交換の場」を設けたところで、議論は深まらない。プロセスが見えない結果を見せられるたびに住民の不

安はつる。これまでの村の対応からうかがえるのは、「住民から意見をもらう」場としながらも、結論は出ていて「聞いた」という形を作りただけのように見える。住民から発せられた「意見」というのは一体どのような手順を踏んで現実味を帯びるようになるのか、「現場の声」は果たして村政に反映されているのだろうか、現在村で行われているすべての議論の場において問いかけたくなる。

より開かれた「村と住民」との「意見交換の場」を求める署名集めを実施

これまで村は「リニアは村にとっては迷惑」といながら二言目には「広域連合」（南信州広域連合）や「期成同盟会」（リニア中央新幹線建設促進飯伊地区期成同盟会）などの組織の名前を出してリニアは長年推進してきたものだから大鹿村だけ反対してもダメだ、などといった理由を述べてきた（ちなみに私たちは反対しろとは言っていない）。一組織が推進してきた事実はあるかもしれないが、それが理由で「大鹿村」としての意見が言えない、住民の生活が守れないといった理由になるのだろうか。大鹿村にとって、また私たち村民の生活にとってこれらの組織がどれだけ大きなものなのか、必要なものなのか、またこれらの組織にどういう経緯で加盟しているのか、少なくとも私たち若年の住民は説明を受けていない。それも踏まえた上での議論がこれからの村を考えて行く上で必要なことだと、このリニア工事に際して考えた。

そこで仲間と共に署名活動をしてみた。内容はリニア計画に対して村がきちんと説明責任を果たすこと、及び村と住民との意見交換の場を密に諮ることを望むというもの。

初めての住民を対象にした署名活動だったので、やり方も手さぐりだった。今回は自治会内で回覧をお願いし23の自治会で回覧、約1カ月で136筆の署名が集まった。この結果は、村民約10人に一人の割合で「村の説明責任を求めている」ということになる。また回覧をしていただけなかったところは、村内に署名ポストをつくることで補った。最終的に、回覧していただけたのは大鹿村の総戸数の76%、一方回覧いただけなかったのは24%だった。

今回の署名用紙の回覧に至っては各自治会長を個別訪問してお願いして歩いた。二つ返事でOKしてくれるとこと、署名内容をしっかり読み込んだ後、何回かやり取りをしてからOKしてくれたところ、自治会内の班長会にかけた結局NGだったところ、「リニア」の文字を見ただけで断られるところ、様々だっ

た。驚いたのは、リニア工事の被害が大きいと予測される自治体に限って回覧を拒否するといった現象だった（もちろん積極的に回覧を実施して下さったところもある）。感触としては、結論がわかっているリニア工事にものを申す事自体に嫌悪感を感じる「リニアアレルギー」なるものがすでに発生しているのかもしれないと感じた。

「言っとることはその通りなんだけ一ど、村との関係上署名は出来ん」「村はあんなもんだで、何を言っても無駄な。自分の仕事をやとった方が得だに」「私たちは静かに暮らしているんだから、巻き込まないで」今回の署名活動に際し、住民から聞かれた言葉だ。こういった意見がこれまでの村と住民とのリアルな関係性を映し出しているのかもしれない。お上の言うことには従っておいた方が得——。そんな考えを定着させるような歴史でもあったのだろうか。